

福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。



奥会津をつなぐ人々

ちばのや はなごまご

—千葉之家花駒座(檜枝岐村)—

江戸時代から代々受け継がれてきた檜枝岐歌舞伎を継承する「千葉之家花駒座」が昨年、設立100周年を迎えた。270年以上の歴史を誇る村の伝統文化を大切に守り、次の世代につないでゆく座員たちの姿取材した。



時代を超えて受け継がれてきた  
檜枝岐歌舞伎、次の100年へ

役場の事業所職員として働く彩夏さん(左)。舞台上では、普段とまったく異なる役者の顔になる

先輩座員のような“きれいな歌舞伎”を目指して



2022年6月に開催された「千葉之家花駒座設立百周年記念特別公演」。姫役を演じた阿部彩夏さんは、先輩座員からたくさんのことを学びながらその背中を追っていた。



百周年記念特別公演の前日夜に行われた通し稽古。舞台上の左が彩夏さん

「広大、頭下げるな」「もつと腰下ろせ」。2022年6月23日夜。檜枝岐村役場隣にある東雲館4階の多目的ホールに、千葉之家花駒座の星昭仁座長(68歳)の声が響く。舞台の上では、翌24日に開催される千葉之家花駒座設立百周年記念特別公演の通し稽古が行われていた。演目は、本能寺の変で主君を討った明智光秀(歌舞伎では武智光秀)とその家族の悲劇を題材にした「絵本太功記 尼ヶ崎の段」。役者も裏方もすべて花駒座の座員が務める。竹本の室井一仁さん(4ページ参照)以外は、全員が檜枝岐村の村民だ。

この演目のヒロインともいうべき役どころ、光秀の息子・十次郎の許婚・初菊を演じるのは阿部彩夏さん(29歳)。生まれも育ちも檜枝岐村で、子どもの頃から檜枝岐歌舞伎を見て育った。花駒座に入ったのは24歳のとき。「座員の皆さんに『裏方として入らないか』とお誘いいただき、『裏方なら』と入りました。だから、役者をやる気は全然なかったんです」と笑う。

翌年、25歳のときに「玉藻前旭の袂 道春館の段」の初花姫役で初舞台を踏んだ。「1月にその年の演目が発表されるんですけど、そのときに『はい、台本です。がんばってください』と渡されて、『えっ?』と(笑)。びっくりでしたね。今回演じる「絵本太功記 尼ヶ崎の段」の初菊役は2020年以來だという。

**24歳で花駒座の一員に裏方のはずが今は役者も**

※年齢は取材時のものです。



こちらもチェック!

<https://okuaizu.net/flowlist/>



星座長や先輩座員が実際に振りをやってみせて若手に教える。こうして檜枝岐歌舞伎は古典の形のまま、代々伝えられてきた



練習用の着物を着て通し稽古に臨む彩夏さん。衣装やかつらをつけるのは本番だけだそう

**古典の形で残る言い回しや所作を先輩が後輩に指導**

檜枝岐歌舞伎は、江戸時代後期に村人がお伊勢参りに出かけた際、上方や江戸で見聞きした歌舞伎を村に伝えたのが始まりとされる。「檜枝岐歌舞伎は、中央の歌舞伎とは違います。独特の言い回しや振りが代々伝承されてきたので、昔ながらの古典の形で残っているのが特徴です」と星座長が教えてくれた。その芝居の基本は「イチ口上、二眼、サン振り」という。口上はセリフ、眼は目や顔の表情、振りは所作のこと。これらは台本ではわからないので、先輩座員が後輩に直接指導して伝えている。



化粧が終わると楽屋の2階で着付けを行う。「暑いし重いし、夏の公演は大変です(笑)」と彩夏さん

今回、彩夏さんを指導する先輩の一人が、光秀の妻で十次郎の母である操役を務める平野真美さん(55歳)。20代後半で花駒座に入り、初菊役で初舞台を踏んだ真美さんは、彩夏さんにとって頼りになる存在だ。「私、セリフの言い回しが苦手なんです。頭ではわかっているんですけど、いざ言葉にするのと独特の抑揚がうまく言えなくて、毎回真美さんに教えていただいています(彩夏さん)。「セリフ回しは一緒に大きな声を出して練習しました。教えたとおりにやってくれるから、とても教え甲斐があります(真美さん)」

もちろん真美さんも、先輩座員からセリフ回しや表情、振りを教わってきた。親から子へ、子から孫へ、先輩座員から後輩座員へ。こうして檜枝岐歌舞伎は、270年以上にわたり代々受け継がれてきた。星座長やベテラン座員が真剣な眼差しで稽古を見守り、若い役者たちのセリフ回しや振りを細かく指導する姿に、「伝承の形」を実感する。

**檜枝岐の舞台の楽屋風景 役者の化粧も伝統の一つ**

6月24日。千葉之家花駒座設立百周年記念特別公演の当日は朝から青空が広がり、午後には汗ばむほどの陽気となった。公演は、村中心部の鎮守神社境内にある国指定重要有形民俗文化財「檜枝岐の舞台」で行われる。村の人たちが「舞殿(村の方言では「めえでん」)と呼ぶ舞台は神社に向かって建てられ、まるでローマのコロッセオのように石段の観客席が取り囲む。

公演開始約2時間前の15時過ぎ。舞台裏手にある楽屋では、彩夏さんはじめ公演に出る座員たちが準備を始めていた。この日出番がない座員は裏方として舞台の設営をしたり、役者の化粧や着付けを手伝う。楽屋には笑い声が絶えず、和やかな雰囲気だ。

羽二重(頭髪を隠す布)をつけた肌襦袢姿の彩夏さんが化粧を始めた。「化粧も先輩たちに教えていただきました。でも、まだ時

化粧と着付けが済んだら、最後にかつらをつけてようやく支度が終わる。舞台上がるまでに大変な手間と時間がかかる



彩夏さんの化粧を手直りする真美さん(右)。経験を重ねて若手もコツを覚えていく



楽屋1階が化粧部屋。先輩座員のアドバイスをを受けつつ、自分で化粧をするのが基本



許婚の十次郎との悲しい恋物語を堂々と演じる彩夏さん。煌びやかなかんざしと艶やかな着物が舞台上に映える。檜枝岐歌舞伎では昔から女性も役者として舞台上に立ってきた。現在も約30人の座員のうち10人が女性だ

間がかりますね」。そう話す彩夏さんの隣で、真美さんが慣れた手つきで化粧をしていく。

油で眉を隠し、ドーランを塗り、凹凸を出すため顔全体に朱を塗った後で白粉を塗る。「もうちょっと濃く。まだ薄いね。うん、そんな感じかな」。役者歴40年以上の先輩座員が彩夏さんにアドバイスをする。白粉を塗ったら眉を描き、唇に紅をさす。化粧が進むにつれて彩夏さんの表情が引き締まり、役者の顔になっていく。一通り化粧が終わると真美さんが確認し、手直しをする。舞台裏でも先輩座員から後輩へ、伝統が受け継がれていた。

### セリフ回しや所作が美しい 「きれいな歌舞伎」が目標

17時。舞台清めの「寿式三番叟」で、千葉之家花駒座設立百周年記念特別公演の幕が上がった。舞台袖で座員たちが笛や鼓、太鼓を奏で、楽屋で準備をしている役者たちも一緒になって威勢よく掛け声をかける。その頃、彩夏さんは着付けの真つ最中。最後にかつらをつけると、艶やかで美しい初菊の完成。あとは出番を待つだけだ。

17時45分。ハルゼミとヒグラシの声が響く中、「絵本太功記 尼ヶ崎の段」の幕が上がった。許婚の十次郎の出陣を嘆き悲しむ初



### 絵本太功記 尼ヶ崎の段

武智光秀(明智光秀)の母・皐月は主君を討った我が子を恥じて尼ヶ崎に隠居する。そこへ光秀の妻・操と息子・十次郎が訪れ、十次郎は許婚の初菊と仮祝言をあげて出陣する。真柴久吉(羽柴秀吉)は旅僧に身をやつし、皐月の家に潜む。光秀は久吉を狙って障子越しに竹槍で突くが、実はそれは皐月だった。深手を負って戻った十次郎と皐月が息絶え、光秀は涙を流す。

当日は県内外から大勢の観客が訪れ、節目の公演を楽しんだ。檜枝岐歌舞伎は、福島県重要無形民俗文化財に指定されている。「檜枝岐の舞台」は明治26年の大火で焼失し、現在の舞台は明治30年頃の再建。石段の観客席の上、舞台正面に鎮守神社が祀られている

菊は、十次郎に諭され、涙ながらに重い鎧を運んで戦の支度を手伝う。仮祝言の盃を交わして初陣に赴いた十次郎だったが、負傷して戻り絶命する。光秀の母・皐月もまた、誤って光秀の手にかかり、息を引き取る。悲嘆にくれる操と初菊の姿が観客の涙を誘う。真美さんとともに彩夏さんも堂々と演じ切り、盛大な拍手の中で節目の公演の幕が閉じた。

「無事に終わってよかったです」。辺りがすっかり宵闇に包まれた19時過ぎ。楽屋で彩夏さんがホッとした表情を見せた。舞台の感想を尋ねると、「十次郎とおばあさんが亡くなる前の真美さんの泣きの演技が素晴らしくて、釣られて泣きそうになりました。やっぱり良かったです」と微笑んだ。

自身の演技は「まだ全然ダメ」と話す彩夏さんの目標は、真美さんをはじめとする先輩座員のように、「きれいな歌舞伎」ができるようになることだという。

「皆さん、セリフの言い回しや所作が本当にしなやかできれいなんです。自分もいつかはそうなれたらいいなと思っています。」「何年やったら先輩方のようになれるんでしょうね」と笑う彩夏さんだが、これからも「きれいな歌舞伎」を目指し、千葉之家花駒座の一員として檜枝岐歌舞伎の伝統をつないでいくつもりだ。



操役を演じた真美さんは役者歴25年以上のベテラン。彼女の「きれいな歌舞伎」は彩夏さんの目標だ

舞台の上で光秀(右)一家の悲劇が繰り広げられる。奥にいるのが光秀の母・皐月と妻の操





## 千葉之家花駒座 座員たちの横顔

約30人で構成される千葉之家花駒座。「床山」<sup>とこやま</sup>「竹本」<sup>たけもと</sup>として一座を支えるお二人に話を伺ったほか、百周年記念特別公演の前日と当日の座員たちの様子を紹介する。

## 先祖代々関わってきた歌舞伎を 裏方として支えています

床山 星あさみさん



百周年記念特別公演の楽屋で、役者さんにかぶせる前にかつらをきれいに整えるあさみさん

**両親も座員だった花駒座  
自分もやるべきと一員に**

私は檜枝岐生まれ、檜枝岐育ちです。東京でアパレル関係の仕事をしていましたが、1996年に村に戻ってきて、現在はキャンプ場とカフェを営んでいます。千葉之家花駒座に入ったのは1998年。当時の座長や後援会の方に誘われたことがきっかけです。両親が座員でしたし、先祖代々檜枝岐歌舞伎に携わってきたので、自分もやるべきかなと思いついて入りました。

花駒座では「床山」と呼ばれるかつらの係をしています。床山の仕事は先輩に教わりました。練習ではかつらをつけないので、私の出番は公演のとき。楽屋でかつらをきれいに整え、役者さんに羽二重(かつらの下につける髪の毛をまとめたりする布)をつけ、それからかつらをかぶせます。

**役者がかつらをつけて  
ピシッと決まるとうれしい**

檜枝岐歌舞伎で使っているかつらのほとんどは、かつら屋さんをお願いして作っていただいております。立役や女房など30台ほどあ



本番中にずれたり落ちたりしないよう、詰め物で調整してかつらをかぶせる。ちょうどいい具合にするには経験とコツが必要だ

ります。プロの歌舞伎役者さんは、公演のたびに自分の頭の大きさや形に合わせて作ったかつらを使用しますが、檜枝岐歌舞伎の場合は配役が変わっても、同じ一台のかつらを使いまわします。重くてずれやすい女房のかつらは、それぞれの役者さんの頭に合うようにその都度詰め物をするなどして調整しなくてはなりません。ちょうどいい具合にするにはそれなりの経験が必要なんです。コツをつかむまではいるんな失敗をしましたね。今でも毎幕が下りるまで緊張しています。

役者さんはまず羽二重をつけ、化粧を済ませたら次に衣装を着て、最後にかつらをつけます。そこで役者さんの姿が格好よくピシッと決まったときはうれしいですね。手が空いたときは着付けの手伝いもします。演目によってはかつらを替えたり、衣装を着替えたりする役もあるので、本番中はずっと裏で控えています。

檜枝岐歌舞伎の役者は素人ですが、役になりきり心を込めて無心に演じる姿が感動を呼ぶのではないのでしょうか。この先もずっと続いてほしいという思いで、裏方の仕事をやらせていただいています。

床山の仕事で使う道具類。櫛(くし)にもさまざまな形のものであり、用途によって使い分ける



## 伝統の芝居が生きる演奏を 模索してつくり上げています

竹本 室井一仁さん



「役者さんとの掛け合いで、舞台をより良いものにできたときにやりがいを感じます」と話す室井さん

**子供歌舞伎の役者を務め  
義太夫語りはほぼ独学**

私は生まれも育ちも南会津町の田島で、年齢は34歳です。普段は南会津町役場の職員をしており、花駒座では歌舞伎の義太夫節を語る「竹本」を務めています。現在の歌舞伎は語り手である太夫と三味線の演奏者が一対一で組む形が主流ですが、私は弾き語りです。

小学6年生から高校1年生まで、会津田島祇園祭の子供歌舞伎の役者をしていました。義太夫語りを始めたのは中学1年生のときです。石川県で行われる全国フェスティバルに出演することになり、録音テープではなく生の義太夫語りをしようとなりました。そこで選ばれたことがきっかけです。義太夫語りの重鎮だった竹本綾太夫師匠に2、3回手ほどきをしていただきましたが、その後はほぼ独学です(笑)。

**濁りのない、純粹な熱が  
檜枝岐歌舞伎の魅力**

花駒座では昭和35年頃から義太夫語りをする方がいなくなり、録音テープを使って上演してい

ました。私は先代の座長・星一さんにお誘いいただき、2011年4月の新春歌舞伎公演で初めて花駒座と共演しました。それ以来竹本を務め、今は座員として一緒にさせていただいています。

檜枝岐歌舞伎には荒々しさや豪快さがある一方、隅々まで行き届いた所作やセリフ回しもあり、他の芝居にはない魅力があると思います。本当に濁りなく、純粹に伝統を伝えようとする熱がお客様の感動を呼ぶのだと感じます。

檜枝岐歌舞伎がこれだけ人気なのは、やり方を「変えない」からです。私は檜枝岐歌舞伎独特の表現を「花駒座型」と呼んでいるのですが、座員の皆さんにいろいろ伺いながら自分なりに模索し、試行錯誤をして、花駒座型の芝居を生かせるような演奏づくりに努めています。役者さんの伝統の芝居と私の演奏がパチッと合つて、独特の緊張感が生まれます。それがお客様に伝わってくればいいなと思っています。



百周年記念特別公演で義太夫節を語る室井さん。迫力のある語りと演奏は独学とは思えないほどの腕前だ



室井さんの芸名は「竹本仁太夫(ひとたゆう)」。義太夫節では、棹(さお)が大きく大型の太棹三味線を使う。重厚な音色を大きく響かせ、迫力ある演奏ができるのが特徴だ

前日練習の一コマ。「ツケ」と呼ばれる効果音  
(写真手前)や鼓などの演奏もすべて座員が行う



若手の化粧を手伝ったり、アドバイスをするのは  
先輩座員の務め。楽屋でごく自然に見られる風景だ

舞台清めの寿式三番叟を任されたのは28歳の星幸  
太さん。2年前に入ったばかりの期待の若手だ



光秀の母・皐月を演じた星幸雄さん(72歳)は役者歴50年。  
皐月役は11年ぶりだが、セリフはしっかり覚えていたそう



公演前日&  
当日スナップ



公演当日の楽屋にはは出番のない座員も集まり、笑い声  
が絶えない。みな下の名前呼び合う姿は家族のよう



着付け担当の星アツ子さんは一座最年長の77歳。自身も  
かつて着たという初菊の衣装を公演前に繕っていた

光秀の息子・武智十次郎光義  
(みつよし)役を演じた星広  
大さんは、花駒座に入って約  
12年になる38歳



刀や鎧などの小道具類は楽屋2  
階に置かれ、ここで役者が身につ  
けて舞台に出ていく



光秀と久吉が対峙するシーンは「絵本  
太閤記 尼ヶ崎の段」の見せ場の一つ。  
演じたのは星貴人さん(39歳、写真右)  
と星友和さん(49歳)



舞台の設営を行う座員たち。百周年記念特別公演のこの  
日は、大正時代の花駒座設立当時の引き幕を使った



大道具・小道具などを舞台に運ぶ間に  
笑顔を見せる青年部・青年団の皆さん

舞台上の設営は花駒座  
の座員が行い、それ以  
外の舞台周りの設営や  
準備を青年部・青年団  
が担う



## 檜枝岐歌舞伎を支える 村の青年部・青年団



御花(おはな=ご祝儀)の金額や贈り主を  
紙に墨書し、舞台下に貼るのも仕事の一つ

檜枝岐の舞台で行われる公演の  
準備は、檜枝岐村商工会青年部と  
檜枝岐村青年団が手伝うのが慣  
わしだ。前日に花駒座の座員が大  
道具・小道具や衣装などを揃えて  
おき、当日青年部・青年団が軽ト  
ラックに乗せて東雲館から舞台ま  
で運ぶ。そして舞台周りに幕を張  
る、棧敷席にゴザを敷く、受付のテ  
ントを設置するといった設営を手  
際よく行う。その姿は生き生きと  
して、とても楽しそうだ。青年部長  
の星洋平さん(36歳)は、「私たち  
にとって檜枝岐歌舞伎は当たり前  
にあるもの。準備を手伝うことも当  
たり前だと思っています」と笑顔  
で話す。檜枝岐歌舞伎は、多くの村  
民に支えられている。

## 代々続く歌舞伎一家、8代目の三兄弟も活躍中

千葉之家花駒座の座員、平野あさのさんの家は江戸時代から8代にわたって檜枝岐歌舞伎に関わってきた歌舞伎一家。現在はあさのさんと長男の大地さんに加え、大地さんの3人の息子・大夢くん、翔くん、尊くんも一座の子役として活躍している。三兄弟が出演した南会津公演取材した。

### 久しぶりの村外公演で7代目の父と三兄弟が共演

2022年11月27日。コロナ禍以降初となる千葉之家花駒座の村外公演が南会津町の御蔵入交流館で開かれた。演目は「義経千本桜 鳥居前の場」。源義経、武蔵坊弁慶、静御前など、おなじみの人物に扮した座員たちが熱演を披露する中、観客からこの日一番の拍手をもらったのが平野大夢くん(10歳)、翔くん(7歳)、尊くん(5歳)の三兄弟だ。3人が演じたのは、静御前と「初音の鼓」を狙う三枚目の悪人・逸見の藤太の



上:大夢くんは小学5年生、翔くんは小学1年生、尊くんは5歳。3人の下に妹のあかりちゃん(2歳)がいる 右:楽屋で笑顔を見せるあさのさん(右)、三兄弟、大地さんの三世代



家来。父親の大地さん(36歳)が逸見の藤太を演じ、親子4人のユーモラスな掛け合いに客席から笑いと拍手が沸き起こった。

「子どもたちは、間違えずに堂々とやってくれました。もうちょっと客席に顔を見せてほしいけど、お父さんのほうをよく見てやっていますね」。大地さんの母で、三兄弟の祖母である平野あさのさん(67歳)が目を細める。あさのさんも花駒座の座員。この日は出演せず、4人の芝居を客席から見守っていたが、役者歴45年の大ベテランだ。あさのさんの家は江戸時代か

大地さん演じる逸見の藤太(左)と、三兄弟演じる家来たちのユーモラスな掛け合いに会場がおおいに沸いた



### 義経千本桜 鳥居前の場

源平合戦で活躍した源義経が兄・頼朝と不和になり、家来と都を離れる途中の物語。同行を強く望む静御前を“初音の鼓”の麻紐で梅の木に縛り、一行は立ち去る。そこへ逸見の藤太が現れて静と鼓を奪おうとするが、義経の家来・佐藤忠信が駆けつけて静を救う。その忠信は狐の化身だった…。



舞台袖で出番を待つ大地さんと三兄弟。あさのさんによると、3人は家でも歌舞伎や三番叟のまねをして遊ぶことがあるそう

### 自然な流れで舞台に立った頼もしい8代目たち

三兄弟が舞台に立ったのもまた、ごく自然な流れだったという。大夢くんが初舞台を踏んだのは3歳のとき。今回と同じ「義経千本桜 鳥居前の場」で、逸見の

ら代々、檜枝岐歌舞伎の役者を演じてきた歌舞伎一家だ。あさのさんは6代目、長男の大地さんは7代目、三兄弟は8代目に当たる。あさのさんの祖父・星兼美さんは花駒座の第3代座長を務めた。大地さんは4歳のときに「絵本太功記 本能寺の段」の若君・三法師役で初舞台を踏んだ。子役は続けなかったが、高校を卒業して村に戻った18歳のときに花駒座に入った。その理由は「特にな」と言う。「子どもの頃から母の練習についていて、先輩たちに遊んでもらっていました。だから自分も入るのだと思っていました。どうか、たぶん座員のみんなも当然入るだろうと思っていました。じゃないかな」と振り返る。



あさのさんは22歳で一座に入って以来さまざまな役を演じ、花駒座を支えてきた。写真は20代後半で演じた「一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)須磨浦(すまうら)の段」の玉織姫(写真提供:あさのさん)

藤太の家来役を演じた。「大夢も小さいときから練習についできて、みんなに遊んでもらっていいました。自然な流れで、当時の座長から『今度出るか?』みたいな感じでしたね(大地さん)。その後大夢くんは「奥州安達ヶ原 文治館の段」の千代童役や「南山義民の碑 喜四郎子別れの段」の喜一役などを務めた。2017年にはあさのさん、大地さん、大夢くんによる三世代共演も果たしている。また、翔くんと尊くんも、2021年4月の新春歌舞伎公演の「義経千本桜 鳥居前の場」で初舞台を踏んだ。

10歳にして役者歴7年の大夢くんは、これからも檜枝岐歌舞伎を続けたいと話す。「代々受け継いできたからにはやったほうがいいかなと思うし、普通におもしろいから」と頼もしい。「長く続いてきたものなので、これからも檜枝岐歌舞伎を続けていかなきゃいけない」と大地さんも決意を語るが、三兄弟については「自分でやりたいと思うならやってほしいですけど、それは個人の自由。プレッシャーは与えず、本人たちに任せたいと思います」と話す。あさのさんは「檜枝岐歌舞伎は無くしてはいけない大事なもので、大地は年数的にはもう中堅な位だと思います。孫たちは学校を卒業して村に帰ってきたら、また役者をやってほしいですね」と願う。

御蔵入交流館での公演後、楽屋で三兄弟に感想を尋ねたらこんな答えが返ってきた。尊くん「楽しかった」、翔くん「みんな元気にできてよかったかな。でも、最初一枘分をあけるのに狭すぎたから、ちょっとダメだったな」、大夢くん「全体的にはよかったんですけど、杖をドンとやる時にバラバラだったので、そこを反省して次に活かしたいです」。頼もしい8代目たちとともに、千葉之家花駒座は次の百年に向けてしっかりと歩み始めている。

第3代座長を務めたあさのさんの祖父・星兼美さん(写真左。「村政独立70周年記念誌」より)



2017年に「奥州安達ヶ原 文治館の段」で共演したあさのさん、大地さん、大夢くん(写真提供:あさのさん)



2017年に「奥州安達ヶ原 文治館の段」で共演したあさのさん、大地さん、大夢くん(写真提供:あさのさん)

**A**

「一之谷嫩軍記」の熊谷次郎直実の袴や長袴は大正時代のもので、昭和30年代ごろから使っている衣装もたくさんありますよ。

**Q**

大道具・小道具や衣装の中に、古くから使われているものはありますか?

**A**

11演目あります。12月の役員会で翌年演じる幕(演目)と配役を決め、2月から練習を始めます。練習は平日の夜に毎日行い、4月に東雲館で開く新春歌舞伎公演で練習の成果を村民の皆さんに披露します。

**Q**

檜枝岐歌舞伎のレポートリーはいくつありますか?

女性も含め、誰でも入れます。基本的には村民ですが、練習に参加できるなら村民以外でもOK。以前、村の郵便局の職員さんが入っていたこともあります。

**A**

村民なら希望すれば誰でも花駒座に入れますか?

村の有志で会津各地に公演に行くようになり、座名がないと不便なので、大正11年(1922)に初代檜枝岐村長である星愛三郎氏が「千葉之家花駒座」と名付けました。愛三郎氏は初代座長となり、この年を花駒座の設立年としています。村の祖先が千葉平氏の末流であることと、会津駒ヶ岳に咲くきれいな花が座名の由来です。

**A**

千葉之家花駒座の歴史を改めて教えてください。

檜枝岐歌舞伎は江戸時代後期に始まったとされ、270年以上にわたって親から子へ、子から孫へと受け継がれてきました。明治時代になると村の有志で会津各地に公演に行くようになり、座名がないと不便なので、大正11年(1922)に初代檜枝岐村長である星愛三郎氏が「千葉之家花駒座」と名付けました。愛三郎氏は初代座長となり、この年を花駒座の設立年としています。村の祖先が千葉平氏の末流であることと、会津駒ヶ岳に咲くきれいな花が座名の由来です。



文化祭に向け、座員の指導で歌舞伎を練習する檜枝岐中学校の生徒たち(写真提供:千葉之家花駒座)



役者歴44年を誇る星昭仁座長。歌舞伎伝承館「千葉之家」には演目解説パネルや衣装、小道具などが展示されており、檜枝岐歌舞伎をより深く理解できる

教えて!

星座長

知っているようで意外と知らない、檜枝岐歌舞伎と千葉之家花駒座の基礎知識。歌舞伎伝承館「千葉之家」で第11代座長の星昭仁さんに話を伺い、素朴な疑問に答えていただいた。

**Q** 檜枝岐の舞台で行う公演は年に何回ありますか?

元々檜枝岐歌舞伎は鎮守神や愛宕神の祭礼で行われる奉納歌舞伎であり、村民の娯楽でした。現在は5月12日の愛宕神祭礼奉納歌舞伎、8月18日の鎮守神祭礼奉納歌舞伎、9月第一土曜日の「歌舞伎の夕べ」の年3回行っています。

**Q** 檜枝岐歌舞伎を次世代に継承していくために、どんな取り組みをしていますか?

檜枝岐中学校の生徒に座員が指導し、文化祭で歌舞伎の幕を披露してもらうという取り組みを2010年から行っています。これからは檜枝岐歌舞伎を途絶えさせないよう、若い世代に伝えていきたいですね。

**Q** 座長ご自身の今後の夢や目標を教えてください。

檜枝岐歌舞伎を途絶えさせたいというところが一番です。座員の演技の向上や自信につながるのを、コロナが落ち着いたら村外公演を再開して、多くの方に檜枝岐歌舞伎を見ていただきたいと考えています。

詳しくはこちら



DATA

歌舞伎伝承館「千葉之家」

檜枝岐村字居平664  
TEL:0241-75-2342  
(檜枝岐村教育委員会)  
営業期間:4月下旬~11月上旬  
開館時間:9:00-16:00  
入館料:無料

# 奥会津の歌舞伎文化

娯楽が少ない農民の楽しみとして、江戸時代から全国各地で行われた農村歌舞伎。奥会津は特に歌舞伎文化が栄えた地域だった。現在まで脈々と続く檜枝岐歌舞伎のほかにも、一時は途絶えた伝統を復活させ、次世代へとつなげている町がある。

奥会津歌舞伎舞台  
および一座分布図



## 最盛期は奥会津各地で上演された農村歌舞伎

江戸時代、幕府直轄領「南山御蔵入領」だった奥会津では、農村歌舞伎が盛んに行われていた。今も受け継がれる檜枝岐歌舞伎のほか、最盛期には百以上の村で上演されていたという記録が残っている。常設舞台を持ってない小さな村では祭りのときに仮設舞台を組み立てたり、財力のある家が衣装や小道具を近隣の村々に貸し出す仕組みもあったそうだ。

奥会津で農村歌舞伎が栄えた理由には諸説ある。その一つは下野街道や上州街道を通して、関東から歌舞伎文化が入ってきたとい

## 地域住民の熱意により 金山町と南会津町で復活

うもの。また、こんな説もある。会津藩は歌舞伎の練習で農民が集まることを良しとせず、若松近辺では農村歌舞伎を厳しく取り締まっていた。一方、奥会津は役人の目が届かず自由にさせたため、農村歌舞伎が栄えたというのだ。史料が残っていないので真偽のほどはわからないが、想像をふくらませるのも楽しい。

農民の娯楽として隆盛を極めた農村歌舞伎だが、時代とともに上演の機会が減少。やがて檜枝岐村を除き、村自身が演じる地芝居は途絶えてしまった。しかし伝統を蘇らせたという地域住民の熱意により、平成2年に金山町の「山入歌舞伎」が復活。近年まで町の祭礼日の9月5日に毎年上演されていた。また、南会津町の会津田島祇園祭の「子供歌舞伎」も平成6年に復活し、毎年7月22日・23日に上演されている。

南会津町には農村歌舞伎の舞台が2つ現存している。一つは湯ノ花温泉にある明治22年築の「湯ノ花舞台」。もう一つは、大桃地区の駒嶽神社境内にある明治28年再建の国指定重要有形民俗文化財「大桃の舞台」だ。毎年8月上旬に「大桃夢舞台」が開催され、郷土芸能を上演している。



山入歌舞伎は約250年前に始まったとされ、太平洋戦争を機に途絶。地元の「山入近隣会」が平成2年に復活させた



全国でも珍しい兜造(かぶとづくり)の茅葺き屋根の大桃の舞台。昭和30年頃まで旅回りの一座による上演が行われていた



会津田島祇園祭の大屋舞台上で上演される子供歌舞伎。明治時代に途絶えたが、平成6年に復活した

## ただでん 掲示板

特別号

## 只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

新・奥会津だよりFlowの今年度発行分は本号が最後となります。読者の皆様、ご愛読いただきありがとうございます。担当スタッフとして取材に同行することで、この地域の魅力に直接触れることができ、本事業を通して奥会津がより一層好きになりました。掘っても、掘っても、まだまだ宝物が出てくる、この地域はそんな土地だと思います。

来年度は奥会津ミュージアムやデジタルアーカイブ、奥会津7町村文化施設間連携など、様々な文化事業を予定しています。加えて、奥会津地域のありのままの魅力を体験プログラムとして見える化する「奥会津体験博覧会せど森の宴」、本紙にも多数掲載しました手仕事の作り手さんの作品を販売する「奥会津クラフトマルシェ」など、様々な側面から奥会津地域の魅力に触れてもらえる事業を準備しております。

令和5年度も引き続きよろしく申し上げます。

編集・問合せ先

新・奥会津だより「Flow」編集部(株式会社日進堂印刷所内)  
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1  
TEL:090-6852-0953(専用電話) FAX:024-594-2041  
Eメール:flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。  
個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。



自然の中に  
暮らすいとなみ、  
100年先のみらいへ。



最新情報は  
ホームページで  
ご確認ください。

## 只見川電源流域振興協議会

〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地  
奥会津振興センター内  
TEL:0241-42-7125 FAX:0241-42-7127  
Eメール:tdrsk@okuaiizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。本紙は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。